

「復興とは何か」を考える委員会について 議事録

- 日時：2009年9月12日 14:00～17:00
- 開催場所：東京大学大学院情報学環
- 会の名称：「復興とは何か」を考える委員会
- 主催：関西学院大学災害復興制度研究所、日本災害復興学会
- 参加者：田中淳(東京大学)、稲垣文彦(中越防災安全推進機構・復興デザインセンター)、上村靖司(長岡技術科学大学)、中林一樹(首都大学東京)、永松伸吾(人と防災未来センター)、渥美公秀(大阪大学)、宮原浩二郎(関西学院大学)、矢守克也(京都大学)、佐藤慶一(東京大学)、安富信(読売新聞社)、中川和之(時事通信社)、石川永子(人と防災未来センター)、宮本匠(大阪大学大学院)
- 報告者：宮原浩二郎(関西学院大学)、渥美公秀(大阪大学)

○渥美公秀(大阪大学)「復興『研究』への視点」

研究者である前の姿勢と考えること

研究者である前の基本姿勢として、イリイチの「最善の倒錯は最悪」という言葉を引き、専門家がニーズをつくっているのではないか、サマリア人が打ちのめされたユダヤ人を助けたことが目的追求型の反応ではなく、無償の反応であったことを提起しておきたい。

研究者として考えることは、バタイユの言う「富の蓄積や生産によってではなく、〈呪われた部分〉＝富の無償の贈与、消尽、蕩尽」によってこそ、社会が理解できると考えた。そして、ルールが成立しないところに生まれる交換＝贈与を大切にしたい。ボランティアは、有用性の彼方を垣間見る存在ではないかということも考えたい。

知の整理

復興「研究」を行う上で、知の整理をしておきたい。アリストテレスは、知を「エピステーメー(学知)」、「テクネー(技術知)」、「フロネーシス(思慮)」、それぞれに対応する活動を「テオリア(観想)」、「ポイエーシス(制作)」、「プラクシス(実践)」と整理している。極端に単純化すれば、先のものほど考え抜いたもの、後のものほど実践によっているものとなる。この枠組みで、今日は、理論的だと思ったものが実は実践的だったり、実践的だと思ったものが理論的だったりする例を紹介する。

研究の枠組み

理解したいという科学と、動きをつくりたい科学という軸、そして真実にいきつくものと、真実味を求める科学という軸により、4つに分けている。ただし、もちろん図としての科学を考えると、その地には科学ではないものがいくらでもある。科学は科学にすぎない。

理論的なものが実践的

中越地震被災地の方から刈羽村への手紙「あせらないでください」を考えたい。学知としての手紙の論点を考えるよりも、何を現場に届けるかを考えると、「待つ」ということ、「待つ」というキーワードを伝えることが大切なのではないか。

テクネーという知

サンタクルーズの「物語復興」の例がある。「物語復興」の論点は、「復興計画が予算編成書のようなものではなく、「物語」になっている」「策定過程も、上位下達ではなく「物語り」(熟議)を経ている」「キーワード『civic living room』がある」ことだろう。「物語復興」の時間的構造としては、未来の物語から今を意味づけている点が特徴的である。

実践的なものが理論的なもの

塩谷での実践を紹介したい。「葛藤の回避・封印によるローカリティの(再)構築・維持・変容・強化」とも呼べるような「葛藤を通して『葛藤のある範囲が集合体である』との意識が生まれ、集落を積極的に縁取り意味づけるローカリティが生まれる」事態が起きている。

「誰が誰の生をコントロールするのか」

このことをいつも考えておきたい。例えば、周年行事に予期される物語への抵抗。「死者」を悼まない KOBE15 年は想定できないだろう。

補論・心のケア

震災直後の珍妙な風景として、「トイレが流れなくて困っている被災者に「何か困ったことはありませんか」と尋ねる」心のケアを行う専門家がいた。

「心のケア」という言葉の成立と蔓延が「誰のための活動か」を忘れさせてしまう。「ロカルな無資格の専門家以外の非公的場所からの仕事ではない人々＝ボランティア」が行うものが大切ではないか。復興が「心のケア」のようにならないようにと思う。

討論

- ・「被災者のために」という言葉が悩ましい。「被災者」というときに、どこまでが「被災者」になるのか。その世代だけ、それとも子孫も含まれているのか。
- ・専門性に対する悪い部分について、ボランティアの方がうまくいっていること。では、村井さんは専門家なのかどうか。結局、専門性とは何か。経験値が上がれば、ある種の専門性をもつだろう。
- ・専門家は、何が出来て、何が出来ないかを知っている人だろう。
- ・渥美先生が塩谷に行って、塩谷復興したなと思うのはいつなのか。塩谷はどうなったらよかったと思えるのか。復興観にゴール設定ができるのか。
- ・願いや祈りとは、その人にはどうにもならないものに対してこそ本当にピュアなものであると言える。今まで復興を考えるときに、あまりにも、願いや祈りといったモードの考え方を逃してきたのではないか。

- ・寄り添うべき被災者とはという定義次第で、寄り添う人も、寄り添い方も変わるのではないか。被災者に対象をしばりこんだときに、全体の物語を実現できるかが気になる。復興計画と物語も相反するものではなくて、意味づけの作法の違いなのではないか。
- ・個としての被災者に迫るのはそうだが、いわゆる個人ではなく、かけがえのない生としての被災者を考えたい。
- ・被災者は誰かと同じように、専門家が誰かという話も大切。専門家論も大事な話だと思う。

○宮原浩二郎(関西学院大学)

1) 「復興」という言葉の意味

① 「復興」の意味：辞書では「再び盛んになること」

この委員会の「復興」の意味に関する議論は、辞書の意味と比較して、「どこが違ってどこが足りないか」を明らかにして伝えることが大切

② 「復旧」と「復興」の関係性

復旧より復興が良いもの、復興は復旧を超えるものだという安易な説明は危険
復興が創造的に行われるのは良いが、前（必ずしも直前ではない）と比較すべきでない
復旧と復興は同次元で対比するものではなく、復旧は復興のなかの一手段

③ 復旧と復興の区別は現行の災害対策制度の反映

2) 復興の社会的・感性的な側面について

<社会的側面>

復興の主体は「個人」ではなく「(地域) 社会」ではないか
被災者支援は、被災者個人にばらばらではなく、地域再建の支援であるべき
「復興支援制度」の充実を目指すのが、「復興制度」というのはありえない。

<感性的側面>

「ふたたび盛ん」になるというのは、被災者を包含する地域社会にその実感があること
私的・共的・公的の、「共」の部分の感性を大切にすることが重要

3) ポスト成長社会の復興

開発と復興・・・GDPの「増加率」など 復興における開発の側面（成長社会）
企業や行政だけでなく、大衆の心理もあるのでは
日本の「ポスト成長社会」を考えるには 持続可能性 定常性がキーワード

討論

- ・復興は「復=戻す」と「興=盛んにする」のせめぎ合いで、事例によって異なる

- ・復興は、前（直前でなくとも良い）よりも良くすることを目的にするのではなく、結果的によくなればよいと考えるべき。「復興」・・・「前の繁栄の時代＝一番地域が光輝いていた時代」にひきもどすのを目指して頑張ること
- ・復興の主体は市民であり、「国家がさせる」のではなく、「わたしたちがする」のであるから「復興制度」ではなく「復興支援制度」であるべき
- ・昔の良さを取り戻すのは良いが排他性をも生む。特にポスト成長社会では注意が必要。
- ・復興には個と社会の葛藤がある。個の満足の総和が社会の満足になるのかという難しさ
- ・個人を通してしか社会は見えない。復興段階でも互依存性が社会を構成していくのでは。